

GO FOR BROKE
and
JAPANESE CULTURAL CENTER OF HAWAII

ORAL HISTORY INTERVIEW

with

MERRY KIMIKO OKANO

Interviewed by Hayashi, Tatsumi 林 達巳 in Japanese

June 28, 2008

岡野喜美子 インタビュー

林：お早うございます。

岡：お早うございます。

林：今日は2008年6月28日土曜日です。本日のお客様は岡野貴美子さん。91歳の方ですがご主人が岡野亮震さんといわれまして浄土真宗のパールシチ本願寺のご住職をなされていらした方だと伺っています。本日はいろいろお話を伺いたいのですが主として太平洋戦争中いろいろご苦労があったと思いますのでその辺を中心にして伺いしたいと思います。宜しくお願いいたします。

岡：はい。

林：あのまず岡野さんのお名前ですけど岡野貴美子さんでお生まれになったのはアメリカのワシントン州シアトルで旧姓が高下さん。高下さんのご一家のご出身は岡山県と言うふうに伺っておりますがそれで宜しいでしょうか。

岡：はい。そうです。

林：でお生まれは1917年のまあ日本のあれで言うと大正6年ですけどもそれではお生まれになった誕生日を教えてくださいませんか。

岡：ああそうですか。今年でちょうど私は91歳になりました。

林：はい。お生まれはいつでしょうか。

岡：4月の28日。1917。

林：大正6年。

岡：大正6年。はい。

林：それでご主人の岡野亮震さんですが岡野亮震さんはおいくつといますか今ご存命じゃないと

伺っておりますがご主人のお生まれはいつでございましょうか。

岡：そうですね。 明治41年の4月27日。

林：1908年になりますね。

岡：はい。そうです。

林：それでお生まれになったのは日本ですね。

岡：はい。鳥取県の倉吉です。

林：はい。分かりました。

それで岡野亮震様ご主人様はいつホノルルというかハワイの方に来られたのか覚えていらっしゃいますか。

岡：そうですね。1935年だと思います。

林：ああそうですか。で最初はどこか他の島かなんかに行かれたので？

岡：いえ最初は別院ずめでして別院で研修を受けてちょうどパールシチ本願寺に為国先生が駐在しておられましたがあつた先生はちょっとご病気になられましてちょっと留守居にパールシチ本願寺に参りました。ところが為国先生のご病気が悪くてなかなか快方に向かわないのでついそのままパールシチに居残ったのです。

林：それでずっと居られて戦争が始まるまでパールシチの方に居られた。

岡：はい。そうです。そして1951年に再びハワイに帰りましてその後またパールシチに参りまして1964年にモイリイリ、ホノルルのモイリイリ本願寺に転勤になりましてそこで引退いたしました。

林：ああ。さようでございませうか。と言うことは居られたのはパールシチとモイリイリという二つだけと。そう言う事ですね。

岡：はい。2カ所だけです。

林：分かりました。それでその先を進めたいのですがあのお二人の間にはお子様は何人いらっしゃいますか。

岡：三人おります。

林：ああ。そうですか。あの、男の方がお二人ですか。

岡：はいはい。二人とそして娘が一人です。

林：ああ。そうですか。分かりました。あのさっそく戦争中のお話の方に移りたいと思いますがあの真珠湾攻撃がございましたのが1941年の12月7日の朝だったということですね。あのその時のことはいまだによく覚えていらっしゃいますか

岡：その時はちょうど12月7日はお別院の方ホノルルのお別院の方で浄土園のサービスがありま

すいうのでちょうど良いことにサンデースクールはお休みにして自分はお別院に行かなくてはいけない言うて朝5時半頃に家を出まして主人はお別院のほうへ参りますが子供達がまだ寝ておりますから起こしましてちょうど8時10分前頃でございましたね子供たちにブレックファストを食べさせておりました。その時にどーんどーんと大きな音がしましてそしてもの凄い音なんです。ガラスはがたがた揺れるしもうその響きというのはもの凄いものでした。ちょうど真珠湾はお寺からそんなに離れていませんでしたからもうすぐお御堂の方へ走って行ってそしてベランダから見るともう黒煙りが一杯立ち籠めてそして急降下の飛行機が雲の割れ目から急降下で降りてくるのがもう次々と見えるんですよ。それでああこれはひどいことになったもんだねと思って眺めておりますとある一台の飛行機が大抵ね突っ込んで行きますからその後は黒煙で大事になりますが一機だけどうした拍子かちょうどお寺の屋根すれすれに大きな日の丸がこんな大きな日の丸が見えてあこれは日本の飛行機じゃないかしらんと思ってそして帰って今度キッチンに行ってラジオつけてみますと敵が攻めて来たと言うだけで詳しいことはラジオの方は何にも言わないのです。どこの国ともなんとも言わない。ただ敵が攻めて来ただけのアナウンスです。皆気を付けるように。それから子供たちブレックファスト食べさせましてしばらくして居ましたら日本語学校の先生たちが来られまして避難せよと言う事があるからこれから山の方へ避難しましょう。と言うてそして山の方へ避難した訳です。でもその後は何事も無いんです。だからせっかく避難したけどどうかね。避難する前に私は主人が居ませんからまだホノルルから帰ってきていませんのでドアの入り口に山の上に何時何分今避難しますからゆうてその書き置きだけおいてそして先生方と山の方へ行ったわけです。それからですねいくら待っても待っても主人は帰って来ませんのでどうしたのかと思ってたら午後三時頃帰ってやっとな今解除がとけてホノルルから軍部の方へ行くのは危ないから通行止めになっていた訳です。それでやっとな解除になって戻って来たと言うんですよ。これは大変と思って私の置き手紙を見て山まで訪ねて来ましたよ。ちょうどその頃在郷軍人ナショナルガードの人は許可を得ているんな人の便宜を計るために山を又上がったり降りたりやっていたからそれで主人はその内の一人を捕まえて皆が何処へ避難していますかその当時はまだパールシチは今のフリーウェイはまだ有りませんでしたから山の上で上地の方はキビ畑でしたよ。それで私たちが山の方へ避難しますときはこのキビ畑のなかに沢山隠れている人がおりましたけどずーと上まで上がってあそこに病院がありますよね。パールシチに。その病院のすぐ近くまでずーと上まで上がってそして横道入って行ったんです。そこまで訪ねて来ましてそれが三時すぎにいました。もう午後三時過ぎ。そりゃ大変。主人が訪ねて来ましてそれじゃ食料も少し持って来なくちゃいけないね。ここに何日居るようになるかわからないしといて主人も又他の手をかりて一緒に其の人達と山から降りてそしてお寺へ帰って。ちょうど良いことにはその前に新聞なんかでどうも雲行きが怪しいから皆食料を確保するようにと言う知らせが出てましたからそれでまワンケースずつに主人はいろんなものコンビーフとかカンズメ類をいろいろ1ケースずつ買っておりましたからそんなのをちょこちょこ持って来たりして上へ持って来て何日此処に居るか分からないからといてそんなもんちょこちょこ運んだりして今晚はここでまあ夜どうし過ごさなきゃならないと言って心配しておりましたら夕方7時頃だったと思いますがちやがちゃと音がして“レヴェレンド岡野！”といて憲兵が二人ほどやって来ましたよ。それで“イエス、サー!”言うて主人は出て行きましたがね。何かかと思いましたが“これからちょっと来てもらいたい。”“何処行くの?”と聞いても何も言わない。ちょっと来てもらいたい言うだけで、そいじゃ行かなきゃいけないと自動車の鍵もハウスのキーもそのまま自分が持ったままちょっとと言うからすぐ帰れるものと思ってみんな持って自分は出てしまったから後になって考えますと其の時あと困りましたね自動車の鍵も家の鍵もないからねもう家に帰った時私が大変困りましたね。それからその晩は山に避難して一夜を明かすつもりでした。夜中に雨がしとしとと降って来てまあ良いことに主人が皆に手伝ってもらって食料を運んだしテントも持って来てもらったりしてテントを張ってましたから雨になっても少し助かりましたよね。まあそこに私たちグループ日本語学校の先生たちやらセカンドストリートの人たち皆ちょっと集まった。皆いろいろの所へ集まりましたからね。。

林：そうすると何百人も同じような所に居られた訳ですね。

岡：それで私たちのセカンドグループね。セカンドストリートのお寺の有ります所のグループ14、5人テントを張ってそこで夜明かしですよ。その時にあなんですねこれは雨になったら大変だねと話している内に今度またバリバリバリと音が聞こえるのです。真珠湾の方でまたなんか空襲がやって来たのかねと思っておりました所がアメリカの援軍が来たんです。あの本土から。こちら慌ててしまって敵機襲来と思ってばんばん撃ち落とされた飛行機もあつたらしいです。慌てていましたからね。その頃。そういう話も聞きました。まあそれでとにかく一晩そこですごしてそれから明るく日はワイパフまでやっぱりここは危ないしワイパフの本願寺に我々ね一応集まりましてそこで午前中過ごして午後からですね家に帰ることができました。ところが先ほども申しましたように自動車のキーも無いしハウスのキーも無いし家まで送って貰った事は良いですがハウスに入る事が出来ないのが我が家でありながら泥棒猫のようにどこから入ろうかぐるぐる回ってウィンドウのね少しルースな金網の所探してはねよじ登って這い上がってそして中に私が先に入ってあと子供が入れるように表を開けたりしたような具合で。

林：それはそうすると翌日になる訳ですね。

岡：はい。翌日です。

林：でもその時にはご主人様はもう連行された後だったのですね。

岡：はい。ちょっとと言って連れて行かれたつきり。

林：でそのお家に帰られた時はまだ何処に居られるかと言う事もご存知なかった。

岡：ぜんぜん分からない。だからね人の話ではメイビーこれはただ事ではないよ。銃殺されたかも知れないしどうなったか分からない。どこに居るといふ事の連絡のなにもない以上はわかりませんでしょ。それでどこだろ何処だろと皆に聞いても皆も知らない。だんじょう(?)でも話もないし。それで困っていました所2週間ほどして新聞にでました。どこそこの移民局に居ってそして今度いま当分の所移民局に収容されて居るがその次はサンドアイランドに移される。それで移す前に12月の終わりでした。こんどはテント生活になるからサンドアイランドにテント張ってねテント生活になるから衣類それから着替え髭剃る物とかなんかね身の回りの物をみな持って行くようにというのががやと12月の終わりに許可がでまして身の回りのものを届けた事がございます。

林：それは軍の方からそういう風に言われた訳でご主人が直接そちらにご連絡をされた訳じゃないですね。

岡：全然。そういう事は出来ません。

林：と言う事はその間は全くご主人とは文通も出来ない。話しも出来ない会う事も出来ない。

岡：はいはい。それでもう年も明けまして明るく年になってやっと代筆ではがきが来ましたよ。ところがやっぱり黒い線があちこちに引いてある様な事でね検閲がありますしやと来ましたが明るく年の何月頃でしたかね。サンドアイランドから今度はメインランドの方に送られるらしいと言う事は分かりましたけど何処へ行くのか何日位かそんな事は全然分かりません。詳しい事は全然分からない。

林：実際にはご主人様はその翌年と言う事は1942年の2月の20日ですか。第一回の船でサンフランシスコの方へ向われている訳ですけど。そうするとその間全く音信不通でお会いになる事も出来なかったと。出発までは。

岡：はい。そうです。出発までは。その前に衣類はスーツケースに入れて届ける事は届けましたけども会う事はできないんですね。

林：なるほど。じゃ。その間奥様をはじめご家族の方は大変ご心配されたですね。

岡：はい。心配しました。一体どうなって居る事か。生きているのかな。もう殺されたのかな。どうだろうかと思って心配いたしました。

林：それでまあ失礼な話ですが毎日の生活もやはりご主人が居られなかったので大変でしたよね。

岡：そうそう。収入は有りませんしね。まあ有り難い事にお寺でしたからメンバーの人が皆心配してくれましてメンバーの人達がサポートしてくれました。

林：それでご主人がメインランドの方へ移されて最初に手紙が来たのはいつ頃なんでしょうか。

岡：メインランドに移されてそしてああ英語じゃなくちゃいけませんから。。

林：そう。最初はそうでしたね。

岡：英語じゃなくちゃいけませんから主人は英語は書けないでしょ。英語は。だから代筆を頼まなくちゃいけないし代筆に大勢の人がねその人にね頼むからやっぱり順番がありますよね。2月に向こうへ参りましたけどもやっぱりちょっと遅かったですね。

林：ああそうですか。何か物の本によると一部の方はサンフランシスコへ着いて1週間位エンジェルアイランドという所に收容されてそれから汽車に乗って奥地へ入っていったのですがその間にお金のある人は切手を買ってですね出した人もいるらしいんですが、だからそういう事は出来なかったのですね。

岡：はあ。出来ませんでした。

林：なるほど。ああそうですか。それでご主人様の場合にはですねここにどういうふうに行かれたかというのはある程度わかっているんですが。先ほど申しましたようにホノルルを出発したのが42年の2月21日でそれでまあ1週間か10日かかってサンフランシスコに着いたのですね。それでそれからウィスコンシン州のキャンプマコイという所にですね。

岡：ウィスコンシンにですね。

林：はい。ですからもう本当にアメリカ大陸の一番向こう側の東側の方に動かされたようで。

岡：そうそう。ウィスコンシンから今度テネシーに移されてそれからルイジアナにも移されてそしてそこからテキサスのファミリーキャンプに移ってそしてそこで家族が来るためにバラックを建てなきゃいけないの。自分たちの手で。出来ないのに皆自分達の家を建てた訳です。そして私たちを迎えてくれた訳です。けども私達は明くる年の9月に中立国と話を通して交換船が出るからそれに間に合うように8月の20日頃にもうアメリカに渡るように希望者は赤十字を通して話が有りました。それで私も子供が小さいから主人は日本に帰る方を請願してるし、そし

て日本に帰りたくない人も子供さんの教育上ハイスクール、大学の人は残りたいと。まあ子供の小さい人は日本に帰りたいたと。とにかくふたとうりに分かれてそれであれですね請願書を出していたらしいです。ところが私どもの第一回の招集は45家族ぐらいでしたかね総人数にすると何名位でしたかちょっと。。。

林：あの此処から行かれた御家族の方はドクター村井のご夫妻がリーダーで137人の方が岡野さんのご家族含めてメインランドへ行かれてますね。

岡：そうそうそう。

林：それが1942年の8月18日にここをお出になったという記録が残っています。

岡：はい。それも船で出まして一週間位かかりましてサンフランシスコへ着きましたよね。そしてサンフランシスコ着いて今度は汽車でずーと東の方へ向かうのですが汽車でいく時にシカゴまで行きましたら9月の船がまだ出ないからしばらく待機しなければならない。ということで私ども家族の者はノースカロライナまで下がって、そしてそこでちょっと小半年過ごしまして、そしてテキサスへ参りました。

林：これは大変な大旅行だったと思うんですが。

岡：そうなんです。ですからもうパールシチを出まして、ハワイを出まして、そしてメインランドへ渡って、そしてテキサスのほうに居って、それから今度また船に2ヶ月も乗ってそして地球の裏回りを通してそして日本へ帰るとそれも2ヶ月かかるゆう予定でしたからね。大変でしたよ。ところがその船がいつ出るかそれも分からない。1942年には船は出ないと言う事になったからそうすると来年かね再来年かねいうところでしたが、今度テキサスで家族で暮らして居るうちに43年に船が出るそれも中立国をとうしての船でアメリカから1500人日本から1500人交換の船でグリップスホルムというスエーデンの船に乗せられてそしてインドまで言った訳です。

林：あの交換船のことはまた後でいろんな事を伺いたいのですが少し遡りまして何故メインランドに行ってそれから交換船に乗って日本にお帰りになりたかったか何か家庭のご事情ないしは特殊な思いが有ってお決めになられたのでしょうか。

岡：それは主人は家族を共に連れて帰ると言う事ですから私は主人の意向に従った訳です。主人は第一自分は長男ですし、こうゆう戦時中に日本がどうなっているか親の事も心配です。そして子供はまだ小さいからこれから教育をつけるには日本ですかアメリカですかまだまだ決めていない頃で子供は丁度長男が戦争になった時4歳と長女が三歳でしたから年子の二人でしたから明るる年ですと5歳と4歳ですね。まだまだ子供でしたから親としてはとにかく一ぺん日本へ帰りたいたとそして日本の両親やおじいさんおばあさん達にも会わせたいしというような事でとにかく日本へ帰る方に請願しておりました。ところがそれは結局はまあ良い面と悪い面と両方ございますが私達としましては子供が日本でしばらく生活する事はそして日本の親兄弟に皆会えてそして日本の様子も分かって子供の将来の為にもとても良かったと思います。そのかわり戦争が終わったらもうすぐハワイへ行くのだと言う事は本人の次の希望でそのままパールシチを後にしたのですから気にかかって気にかかってしょうがない訳ですよ。それでもう必ずまたハワイへもう一回行くのだと主人もその事が一心でしたから。主人がハワイに帰る許可を得たのはまだ正式にパスポートが下りない前にあんなたちのケースは日本（アメリカ？）へ帰る権利が有ると、世界一周の旅行に出ている途中で日本へちょっと中途で入っているんだから、もとの本国へ帰る権利が有るから帰っても宜しいと言う事でパスポート無しでそういう書類でハワイへ帰る許しが出た訳です。それから後の人はみな正式な手続きをしてパスポートで

帰った訳です。だから運が良くて皆とんとん拍子にいったと思います。

林：あの中にはですね。抑留された方の中には帰国するか日本にしないかという事で相当ご本人とハワイに残っているご家族の間で意見が割れてですね帰るとかいや帰らないでくれとかいろいろなめめ事もあったみたいですね。

岡：そうです。やっぱり子供さんの都合でね。私たちみたいに子供が小さいとどっちでもなりますがハイスクールや大学の子供さんをかかえている人は今から日本へ帰ってもねどうなるんだらうかね。子供の事を考えたら心配ですよ。だから自分たちは戦争が終わるまで何年かかるか知らないけれどこのキャンプの中で待機しようというふうに分れる訳ですよ。だから私なんかのように子供が小さいのはもう否応無しに主人に従うというふうになります。

林：そうするとまあ岡野さんの場合にはあまりそういう意見は割れなかったと。。

岡：割れないでね。赤十字をとらして行くか行かないか“イエス オア ノー”ですからね。もうアメリカへ行きますと。イエスと返事をした訳です。だからアメリカへ行かない人も沢山残りましたよね。行った人も有りますけど。そこで分かれました。随分。だからアイエアの本願寺とかワイパフの本願寺開教使さん方が相当高齢に達していらっしゃる方は皆残られたです。奥さんも。奥さん達も自分たちは日本へ帰らないと。こちらも日本へ帰らないと。私だけがもう日本へ帰ったわけです。だから後がどうなっているかも分かりませんからね。それで主人としてもただただ引っ張られて出ただけでメンバーの家にさよならも何も言ってないしだから気になって戦後は又真っ先にこちらに帰って来たような訳です。

林：それでまたちょっと話は戻りますがご家族はまだホノルルに居られる間ご主人だけメインランドに居られたのですよね。その間はいろいろなお手紙でやり取りがございましたか？

岡：その間はね向こうからも検閲の手紙。こちらからも検閲の手紙で。手紙はね時に応じて。。

林：その時はご主人の方はもちろんご家族の方がハワイに居られる訳ですから相当心配されていたと思うのですが何かその当時の事で覚えていらっしゃる事はございますか。

岡：その当時ねまあ有り難い事にお寺のメンバーの方が皆気を使ってくださって自分たちは何事も無しにこうして生活しているけれどお寺の先生は大変ですね。開教使さんは大変ですねと。メンバーはメンバーなりに心配してくれてやはり寄付をつないでは私の方へ届けてくださった。メンバーの御陰でまあ生活には何も不自由はしませんでした。皆に良くしてもらいました。

林：その頃はもうパールシチの方はもう平和を取り戻したというか。町中を普通に歩くとかは可能だったのですか。

岡：はいはい。もう一年経ちますとね。

林：そうすると例えばお買い物なんかに出かけるとかそういう事も出来ましたか。

岡：はい。できました。

林：もう殆ど変わらない訳ですね。

岡：はい。全然変わらない。ただね夜がね広い屋敷にね、お寺と学園のある広い屋敷に私と子供二人ではやっぱりメンバーの人も心配ですから誰か泊まりに来てもらいましょう。それじゃね学

園の生徒が居りますからね7、8年生の大きい子供が自分たちが泊まりに行く言うて最初はね、泊まりに来てくれましたけどそれも余り長く続きません。だから近所の藤谷さん言うてねこの人はバーバーショップを経営して居られました。そのこのミセスが婦人会の会長でしたからとても心配して家に泊まりに来なさい。すぐお寺から斜め向うに店がバーバーショップが有りました。明るいうちに家に来てそして明るくなったら帰ったらいいからトントントンと歩いて行かれる距離でしたから、そいでそこへずうーと、最初一週間位は学園の生徒が来てくれたけれど代わり番にといいてもこれも面倒ですからそれで藤谷さんの家庭にずーと泊まりに行きました。子供を連れて。そして夜が明けると家に帰ってという具合に。その当時ハワイでも戦後お葬式とか結婚式でも日本人は10人以上は集まってはいけない。何か事があっても10人ならまあ大目に見ると。だけど大勢が集まる事は良くないからいうてお葬式でもなんでも大きな事は出来ませんでした。

林：その当時は戒厳令みたいだったのですね。

岡：そうそう。そして開教使さんが居られませんか。だからまあ開教使補助ぐらいの人がねおられました。そういう人がずっと別院でもテイクオーバーしてやって居られました。

林：それでまあクリスタルシチの方にですねご出発になる訳ですけども、その時は何かごたごたがあつてようやく決まったと言うのじゃなくて政府の方からあなたは選ばれたからこの船に乗りなさいというようなふうな感じでスムーズにいったわけで

岡：はい。スムーズに行きました。赤十字をとうして話がありましたからそのちゃんと理由を言って主人からも家族一緒に帰る事を希望してると言う事ですからそれに従うしかしようがないです。

林：他のご家族も沢山おられたと思うのですが大体同じような感じでみなさん希望したとうりに乗れたと言う感じですか？

岡：と思いますね。わたしそのごたごたは聞いておりません。何も。ただね子供さんがハイスクールとか大学生の家族の人は皆帰りたくないという意見のひとが多かったですから。そういう人は奥さんが残っていてもなにも心配ないですよ。子供さんが大きですから。で私みたいに子供が小さいのはもう残しておいても主人のほうに心配だからね。もう呼び寄せてくれましてそれでま一緒に行った訳です。ところが私たち第一回船の、ファミリーの移動としては第一回船でしたがそのなかでも残る人と残らない人とだからハワイに残る人とそれから今度アメリカに行かないで自分達はハワイに残ると言う人とそれからまた行ったグループの中でもキャンプに残る人とまいろいろ分かれましてね。まあ何年このキャンプに居なきや行けないかそれも不明です。だから主人達行き先不明の地に向かう言うて手紙が書いてありましたよね。今度行き先不明の地に向かうのだから何処へ行くか分からないけど移動するんだということは最後の手紙によく書いてありました。

林：やっぱり相当ご主人様がいろいろ移動する時なんか何が起るか分からないと相当ご心配だったですよ。

岡：そうだと思います。でも我々は藤谷さんのお陰でね夜はもう5時過ぎになったらあちらの方へねいってそして夜が明けてブラックファースト呼ばれて帰ってくるいう具合でもう大変お世話になった訳です。

林：あの最初の頃はもうメインランドのご主人にお金とか物を送れなかったようですが後になってくるとすこしは何かハワイの方から物資とかなんか、例えば衣類とかお金とかなんかそんな

ようなものを送る事が許されたようですがなんかそんなようなご記憶がございますか。

岡：あ、別に。あの送って欲しいという物が何か欲しい物が有れば送りますがと書きますけど何も
いない、いないからと。だから送った記憶はありません。ただ一度サンドアイランドを出
る時にスーツケースに一杯下着やら着替えやら入れて。。

林：何か全部名前を書いてお送られたようですね

岡：そうそうそう。大勢の人ですからね。向うはキャンプ生活で。まあキャンプの中の話もいろい
ろ有りますがね。まあ入れ歯をした人も中にはいますからね。よく入れ歯をベッドの横に置いて
寝るとかそういうような話の人も沢山おられました。でもまあ私たちが一番若くて年若のグ
ループでしたから第一回船でも皆年上の人で私があの頃25位でしたから一番若いグループで
したから主人も心配しただろうと思います。けども。。

林：ご家族がこちらからメインランドに行く船はもうちゃんと（していましたが）ご主人の場合に
は船倉にいれられてですね一時間か二時間に一回しかトイレに行かれないで大騒ぎになって。
まあ特に第一回船でご主人は行かれましたからアメリカの方も待遇をどうして良いか分からな
い。

岡：一番厳しいですよ。

林：大変にご苦労が有ったようですがご家族がアメリカに行かれる時の船はもうちゃんとキャビン
で非常に待遇は良かったとか。

岡：ええ待遇は良かったんです。そして今度はシカゴまで行きまして待機の姿勢に入りますがね。
ノースカロライナも一流のホテルでそのホテルにはゴルフ場も有りテニスコートも有りて立派
なホテルで私どもが泊まったのは9階でしたがエレベータでちゃんと上がり下りしてくれるし。

林：と言う事は一つの部屋に御家族だけが住んで居られた

岡：そうそう。そう言う訳。

林：あそこは確か、最初のホテルはリゾートだったようですが何か休暇に行かれたような感じにな
る訳ですね。（笑い）

岡：そうです。あまり待遇が良すぎてねこれで良いのかしらと思うぐらい。ところが政府としても
エクスペンスがかかりますよね。そんなホテルに入れておくという事は。それで一ヶ月ほどし
てから今度はちょっと下町のほうの少し落ちるホテルへ入りました。そこでちょっと3、4ヶ
月居った訳です。

林：でもやはりあれですね。ご主人なんかには比べると待遇は全然違いますね。

岡：そう。（笑い）主人達はその頃キャンプでハンマー持って釘持ってね自分達の家を作るのにおお
事だったらしいですね。私たちは御陰さまで第一回船は家族の方はラッキーでした。

林：で、ノースカロライナのホテルでご主人様なんかとは文通は有った訳ですか。

岡：やっぱり検閲が有りますからねそんなに言う事も有りません。

林：と言う事は御家族としてはあまりご主人がどのような、まあ苦労をされていると言う事は

ご存知だったと思うのですが、毎日の生活がどんなだったかというような事はあまりご存知なかったのですね。

岡：はい。知りません。

林：相当ご心配になったでしょう。

岡：でも皆と一緒にですからね。一人じゃないですからね。皆さんとご一緒ですからね。まあね。

林：で、クリスタルシチには結局3ヶ月ほど居られたのですか？

岡：そうですね。3、4ヶ月居たと思います。

林：で最終的には第二次交換船に乗られるわけですけど。

岡：ええ。1942。

林：で、その時にご一緒にこちらから行かれた方でその交換船に乗れなかった方とかそういった方はおられるのですか？

岡：ああ、おります。だから交換船に乗ったグループはあの浅海さんそれから浄土宗の正木さんそれからペルーから乗った人が2、3人いました。若い先生がたが、それは私は名前は知りません。とにかくハワイからは岡野と浅海さんと正木さんと三人は良く知っています。3人しか乗れなかった。後の人は残されちゃった。そこでどういう分類されたか良くわかりません。この人たちも帰る請願しているのに残されたのですから。

林：ただ政府が一方的にあなたは乗りなさい、という事を言われただけな訳ですね。

岡：それが私、未だにどういう理由でどういうふうだったのか全然分かりません。

林：一方ご主人様の方も相当請願などされたと思うのですが、向こうのキャンプの中ででも第二次交換船に乗るリストが発表されたら大騒ぎになりましたね。

岡：ああ帰りたい人が沢山居りましたから。

林：帰りたい人が載ってなくて全然そんな誰だかも分からない人がリストに載っていたりしてなんかキャンプの中で相当話題になったようですね。

岡：でしょうね。

林：ですから本当に岡野さんの場合には希望どおりに大体事は進んで行ったのですが全く希望したにもかかわらず終戦もこちらで迎えるというような方も沢山おられたのですね。

岡：そうそう。まああの時の事はねいろいろの事がございましたからね。そして私なんかまだ子供が小さいですから対外的な事はあまり耳に入らない方で。子供の世話で一生懸命でしたから。

林：あのクリスタルキャンプの毎日の生活と言うのはどんな様な。

岡：やっぱり軍の方からチケットを貰っていてクーポンのようになっていてミルクも卵もバターもブレッドもみんな配給になっていました。人数に応じて。だから我々は4人家族の配給分がく

るわけで。そしてバラックでも4人家族とこちらは3人家族とが同じ屋根の下でだから小さいバラックです。こんなのが点々とあったわけです。だからこちらの人は帰りたかったけど子供さんも小さかったからでもチャンスがなかった。私の方は運が良かったと思います。全てそのまま。だからテキサスを出る時にも皆金網の所でさよならさよなら、中には金網の所にこう登って残念だった人も居られましたよ。

林：そうすると毎日の生活というのはそれほど何と申しますか見張りのもとに行動が制限されたとかそういう事は余り無かった。

岡：そういうことは別に。キャンプの中は自由でした。それで食事も。

林：で外出はできなかつた？

岡：外出は警護付きで。もし病院に行くとかね。婦人の方でしたらビュウチショップへ行きたいとかいう人は警護付きで、申しこんでおけばちゃんとありました。

林：あのご自身はどこか外へ出られた事ありますか

岡：有りません。だから外は分かりません。キャンプの中しか分かりません。

林：あの当時はたしか日本の方以外イタリーとか外国の方も同じキャンプのなかにおられましたよね

岡：ドイツ人、イタリー人それからパナマから乗った人、ブラジルから乗った（人）とか途中からピックアップして乗って行きましたから。

林：でそういう人たちと交流みたいなのは？

岡：交流は。キャンプの中では大分広いからね。別れておりましたからあんまり交流いうてございませんでした。

林：と言う事はご近所の方と、いうなればハワイで住んでるような感じで近所付き合いをしていたと。。

岡：そういう訳です。そして今後何年ここで居らなくてはいけないかしろれないと言う事で、主人達はこんどは大きな子供さん達やっぱり抱えている人はいますから、そういう人たちの教育問題もありますからね。このままほっておいても日本へ帰るのに日本語も知らない事ではいけないから日本語学校を作ろうじゃないかと。その中で日本語学校を作る話とか教育方針とか教育課程なんかをねいろいろ研究しておりましたが。だから主人は歴史の方をまかされて天照大御神からね神武天皇までのあの時代の事、それからいろいろとみなそれぞれ専門の、地理の先生は地理の事ね、それから数学、日本の読み書き、そういうような事みな専門専門でみな検討し合っていました。それで私の方は出ましたのは明るる年出ましたからね後の事はもう分かりません。でその先生たちがやっぱり残って学園を経営されたと思います。

林：いらっしゃる頃はまだキャンプの中で学校とかそういうのは出来て無かつた？

岡：はい。まだ出来ていません。作ろうじゃないかという話が有った程度でその基礎準備をしておりました。それでもう私たち出ましたからね。9月にいえ8月の下旬にはもう出ましたから。その後は後の人まだ44年45年まだ二年有りますからね。私たち43年に出たのですから、キ

キャンプ生活もわずかでしたよね。

林：それでしたらお子さん達は逆に学校行かなくてすんだから遊んでばかりそういう生活だったですよ。

岡：そうそうそういう生活ですよ。

林：なんか昔、クリスタルシチで無いですけど、別のキャンプで子供の時代を過ごされた方に一度聞きましたらね、あの当時はもの凄く楽しかった。

岡：楽しかった！（笑い） そうですね。

林：もちろん子供ですからそのへんの事情は良く分からないから。遊べたから楽しかった。

岡：私が知っているのは楽しかったでしょうがその人達は戦後終戦になってすぐに日本に帰ったのですよね。終戦になって。そして日本に帰ってさあ大変。日本語も勉強してないしね、あんまり。そしてそうかといって英語もしっかり勉強してないし困られた人が沢山居りますよ。

林：あのこの後がですね、クリスタルシチをお出になって交換船に乗られて、最終的にはシンガポールへ行ってそれでそこで2年ぐらい居られたんですね。それで日本にお帰りになって終戦を迎えられて戦後にまたホノルルに戻ってこられる訳ですが、これからのお話も聞きたいと思いますがちょっとここで一度休憩をします。

(休憩)

林：それでは今度はクリスタルシチからご出発になってニューヨークから先の話ですね。ま、最終的にはまたホノルルへ戻られる訳ですけどその辺のお話を伺っていきたいのですが。クリスタルシチからニューヨークへ向われた訳ですけどその辺の事情は何か覚えていらっしゃるような事ありますか？ 車で行かれたのですか？

岡：ええ。車で行ったと思いますよ。

林：特にご記憶は有りませんか。

岡：特に記憶は有りませんが。とにかく車で行きまして。それでニューヨークまで真っ直ぐ行きましたから。

林：ニューヨークは何日位？

岡：9月1日に船に乗ったということは覚えているのですが、何日だったかは覚えていません。

林：やっぱりでも船に乗る前はいろいろな思いが出て来たのではないですか。長い間アメリカに居られたし。

岡：いやもう後はこの船に乗って帰れば後は自由束縛されないで自由だなという思いだけが先ばしりまして。そしてまだ見ぬ世界でしょ。子供達が今度初めて日本を見るんだし。聞くんだし。お爺ちゃんお婆ちゃんに会うんだし。そのような事が頭に先に走りましてね。とにかく日にちが経たなきゃどうする事も出来ないと思ひましてね。仕方が無いですもね。

林：その時ご一緒に行かれたお子さんとかご主人様とか大体同じ様な事を考えておられた？

岡：と思いますよ。でも後から思いますと主人達はこれから今日本に帰っても又日本の軍隊に徴発（徴集？）されるんでないかと言う思いもあったんじゃないかと思いますよ。だからいろいろな事をやっぱりこもごも頭の中を去来してたと思います。

林：それでニューヨークから船が出た訳ですけど途中モンテビデオとか停まりましたよね。

岡：停まりました。そしてブラジルに停まってパナマからも人が乗られました。ドクター夫妻が乗ってこられましたね。それからパナマの外交官が乗ってこられました。御真影を捧持してね。乗られました。それからブラジルのリオデジャネイロですからそこでもブラジルの人あんまり多くなかったと思います。そこへ乗ったのはパナマの人が多かったですね。それから今度ブラジルを出ましてブラジルの南端を回りましてアフリカの南端喜望峰を回るとき、そのときに一つね、喜望峰は世界中でも最も風の強い所と聞いていまして、どういうことかなと思っていました。ある朝の事、朝起きて食堂に出ますとテーブルに水がすっかり打ってあるんですよ。“あらこれどうした事かね。食事の時に誰か水をこぼしたのかしら”と書いていたら、なあに、船がもうこんなになるんですからね。お皿がごろごろ動いてしまうからテーブルにしっかり打ち水がしてありました。それは驚いた事の一つですよ。それから今度インド洋に出ましたところが、ある日のことね、まだ交換する前ですからね、まだインド洋からインドに入る前の事です。あそこら辺は普通なら波のおだやかな綺麗な町ですよ。ところがデッキにおりましたら船の人が来てね黒いタイヤをポンと海に投げて、椅子があったら椅子も投げて、有りとあらゆる物をぼんぼんぼん投げるんですよ。海の中へ。何事かと思っていたら誰かが飛び込んだらしいと。船からね。飛び込んだらしいと。飛び込んだか落ちたかどちらかだから目印に投げているんだって。船はすぐそこで急停止しませんからぐるーと一回り回ってそして元の所へ来てそしてやっと止まった。そして今度救命艇が降りてあちこち探しましたね。けれど誰も落ちた様子はないし見つからないしということで救命艇が戻って来ました。そしてデッキの上から眺めておりますとその船の回りにさめがもううようよしてるんですよ。吃驚するほど数えきれないほどさめがおるじゃないですか。はあーこんなにサメがねおるならばもしさっき仮に落ちて飛込んだでももうサメが食っていると思って皆ももうこれは助からないはと思って。そのこんど救命艇を船が釣り上げますね。それまでサメがうようよしてますから皆長い棒で皆ばちんばちんとさめの頭を叩いているんですよ。だけでも叩いてる位のことサメは降参しませんよね。なんぼでも次から次とこう頭を持ち上げてくるしね。まああれはもう本当に恐ろしいと思いましたね。だから救命艇に乗ってる人五人位でしたかね。皆気が気じゃなかったと思いますよね。大きな頭がこうして口を開けて向かって来るんですから。それをパチンパチンと櫂で大勢叩いているんですけど。それであんまりこんなと子供に見せても良くないし思ってそこからデッキの端から今度はまちこ（？）でチェアに座っておったんですがとにかくそういうことで船はまた動きだしました。また普通に順調に行きましたがね。それから今度しばらくするとゴアというてこれも中立国のインドにある中立国の領地ですよ。ポルトガルの領地。そこであそこがゴアだと見ると日本の船がもうちゃんと入っているんですよ。それでグリップスホルム号がちょっと半日ぐらい遅れて入ったので日本の方が先に入りました。そして明るる日今度は船のこの船からこの船へロープを張り回してあるんですよ。こちらからこう行く人こちらからこう行く人そのロープをつたって交換する訳です。それで交換する途中で日本からのアメリカ人は皆ほがらかですからハローハロー、オレンジが有るかアップルが有るか言って聞くんですよ。そんなものはなんぼでもあるあるある言うたらうあーと口笛吹いて大喜びして通って行くんですよ。私たち日本人は大人しいから船に乗って日本の船に乗ってそして今度日本の船に乗ったら麦飯とみそ汁とたくわんと梅干しとそれだけです。オレンジやアップルどころじゃないんですよ。今度アメリカ人はちゃんと西洋式の料理で御馳走よばれる。私たちは麦飯とみそ汁で帰らないといけない状態でしたよ。だから日本に抑留されていたアメ

リカ人達はどんなに苦勞されただろうかと思う位でしたよ。それから日本に着いてからはね、そういうちょっと惨めないうても日本では良い方だと思うんですが良い方でそんな食事でしたからね。良い方だったろうと思うんですけども。まあこれじゃ日本もちょっとどうかなあ。もう船の中ですぐピンと来ましたね。これは日本はどうも怪しいよ言うて着くまでが怪しいと思いましたよね。

林：あのご出発の前辺りまではもちろん戦争の状況はあまりニュースは入っていないと思いましたがその辺からだんだんちょっとおかしいなど。

岡：ええ。おかしいなど。第一船の食事がそんなお粗末な物でしたからね。それ以外何も出ないのですから。フルーツやデザートなんてちょっとも出ませんよね。みそ汁と麦ご飯とね。健康食で良いかも知れませんが我々にはちょっと向かない。子供達これよう食べられないと見向きもしないそういう状態でしたが今度シンガポールに着きました。とたんにね要請が有りましてシンガポールで何人か若干名降ろされましたよね。それで私たちも日本へ帰るとばかり思っていましたら主人がここで降りるんだと。ここで何故降りるんでしょうかとは言いませんよ。何にも用件は言いませんよ。ただ降りるんだいうだけで。それで降ろされて。そして降ろされたとたんに主人がどうした訳か海軍側に回されて他の方はみな陸軍側へまわされた。シンガポールは当時もう日本が占領していましたから日本の軍が戒厳令をしいて統治しておりました。だからそこでは否応無しですよ。結局は。それで海軍は三菱造船所のある軍港ですか、軍港になった訳ですよ太平洋のほうで戦争して傷ついた船がみな戻って来てそこで修理してまた出るというような軍事工場ですよ、結局はね。そこにマレー人やインド人が沢山仕事をしています。そこにやっぱり日本語まだ分かってませんから、現地人の人に日本語も教えないといけないしそういう戦部班の仕事が随分ありまして主人は忙しいほうでしたけど自動車一台あてがわれて運転手一人宛てがわれて主人なんかは海軍総統官か大佐かなんかそう言う名目を貰って。。

林：かなり上のランクの

岡：ええ、ランクのね、なにを貰って自動車も貰って運転手もついてそして宿舎はイギリス人が住んでおった家が山手の方で別荘地帯にいっぱい空いてるんです。その良い家を一軒あてがって貰ってそこにはテニスコートもありヤードメンもおりマレー人ですが洗濯婆さんもおってクックはシナ人のお婆さんが一人クックでとにかく3、4人、人を使って良いんです。とにかくそういう生活で何不自由無くシンガポールでは、それも軍の配給で毎週届けてもらって。だからねシンガポールの生活も悪い事はなかったんです。ただ好きなどこにあまり出られない。まだ軍が統一してますから。行かれないんですよ。でも行こうと思えば行かれるんですが行きたくないですよ。子供を連れて行きたくないから。まあ私も殆んど家の中ばかりおりました。そういう様な状態でシンガポールの生活もそんなに苦しいものでは無かったです。まああの生活。

林：そうするとおそらくその当事の状況からすると日本にいた人の方がもっと大変な空襲があったりですね。

岡：それで軍港の近くですから明日は日本から兵隊が入るんだ、それは家のちょっと離れた所通るんですよ。それで日本から入る人珍しいなどと思って、まだ日本からきた兵隊さんが皆40、50の腰を曲げたお爺さんが背中に沢山リュックサック背負って腰を曲げて鉄砲担いで歩いている。ああこれが日本の兵隊さんと思ったですよ。年寄り皆招集してるんだから日本ではね。それで現地におくられるんだから。現地に着いた人はいいですよ。後から聞くと輸送船でやられている人が沢山。私の知ってる人でも3、4人居ります。あの人。私の従兄弟も亡くなっています。いま長男の嫁のお父さんもこれも日本の外国船の船長だった為にエンジニアの方だっ

た為に徴用されてこれもひっぱって行かれてところが途中でぶつん。そしてうちのギョルの婿のお父さんも輸送船でやられている。だから輸送船で随分やられてるんですよね。だけど私たちがシンガポールで見たのは年取った人が皆リュック背負って鉄砲担いで腰曲げて歩いている人が日本の兵隊さんと見て吃驚しました。その時に。ええ。

林：結局その当時あまり外の事は分からないから突如そういうような方達が来られると吃驚されたでしょう。

岡：そうそう。その内しばらくしてから今度シンガポールの情勢が変わって来てガダルカナルの方であちらでも轟沈こちらでも轟沈という話を聞くでしょう。その頃から日本がだんだん負け戦になって飛行機はもう一台もよう上がらない。明日ニューデリーからシンガポールへ9時半に空襲行きます。ノウテイスが来るんですよ。だからその頃には防空壕に入っていないとはいけない。ところがB29どこからこちらに向けてくるかこちらへ向けて来るか見たいですよ。だから防空壕の外まで顔だしてあれ来た来た。向うから来た。どっち向けて行くかね。真っ直ぐ来れば危ないしこっち行くかね。見てはね。頭の辺まで近く来るとね中に入ってね。それでうちの娘がね。あの頃まだ三つか四つでしょ。お母ちゃん何時死ぬの言うて私に聞くんですよ。もう死ぬ事しか子供でも考えていないのかなあと思って。

林：ご心配だった訳ですね。

岡：ええ。子供でももう危ない事を知って。。

林：お子さん達はもちろん小さかったのでしょうけど例えば交換船に乗ってまあゴアで交換があった訳ですよ。その頃なんか全然不安は無かったですか。それともやはり。。

岡：何にも不安は無いです。こちらの船グリップスホルム号はスウェーデンの船だからアメリカ大陸で立派でしたからちゃんとテーブルつきでウェイター付きでちゃんと整備してもらって

林：非常に整然として交換が行われた。という事は全くどなたも両方の国の人たちも不安に思わなかった。

岡：思わなかったと思います。だけど日本から来た帝亜丸乗って来たアメリカ人はやりきれなかったでしょうね。麦飯みそ汁の食事ばかりではね。それでオレンジがあるかアップルがあるか言う事を食べたいから聞くんですよ。真っ先に。なんぼでもあるあるというのと口笛吹いて喜んでわーわー一言って喜んで今度は自分達の国へ帰る船に乗った訳ですよ、あそこでね朗らかだなこの人達は、感心した様なことがありましたがね。そんなにオレンジやアップルが食べたいのかなと思ってね。こちらは何にも思いませんよね。そんな事。

林：でもこの次はそちらがそういう。。。(笑い)

岡：それで今度はこちらがこちらの船に乗ったらそんな物出もしないし見る影もないしね。もう本当にこれじゃあ日本も危ないなと思ったですよ。その時にもうピンと。。

林：その辺からだんだんおかしいとなって。。

岡：それからシンガポールで降りなさいと要請された時にだから主人もすぐに降りたんじゃないかと思えますよね。

林：その辺ご主人がなぜ海軍付きの方になって降りたかと言う事はおっしゃらなかった？。

岡：ええ。全然分らないです。何にも言いません。私もそれが疑問でね。聞いても言わないし。だからどうして私たちだけが海軍の方へ回されたかそれも分らない。海軍に回された事で良い事と悪い事があったんですよね。とにかくそれで今度シンガポールの生活に入りますが順調に我々は軍の配給でメイドとヤードボーイつきで運転手付きで良い暮らししていた訳です。結局は。何にもせんで良いし。アマもいるし料理のお婆さんもいるし。だから良い暮らししていた。けどもだんだん様子が悪くなってくると危なくなる。そのうちにね一年たちましたから今そこにいます昭夫がシンガポールで生まれたんです。1944に生まれた。5月29日に。それで今度1945に日本に帰りましたがその前にね阿波丸(sic) (帝亜丸?) が来るから阿波丸 (帝亜丸?) で自分達は日本へ帰るからと主人が親達に手紙を出していたんです。だから阿波丸 (帝亜丸?) で帰るとばかり思って主人の方のおじいさんも私の方の父も主人の父と私の父と叔父が神戸に居りましたからとにかく叔母も行ったか知りませんがとにかく横浜まで阿波丸 (帝亜丸?) が着く時に横浜の波止場まで迎えに行ってくれたんです。ところが待てど待てど降りて来ないでしょう。岡野言う名前が無いから。一番最後にこれこれこれの人達はシンガポールで降ろされてシンガポールで降りたからこの船には乗っておりません。それでも父達はねがっかりしてしまってせつかく横浜まで迎えに行ったのに戻って来ないと聞いてがっかりして国へ帰ったと言う事は聞いております。

林：じゃ岡野さんご一家がシンガポールで降りるという事はかなり後になってご主人がお決めになったのかも知れませんか。

岡：それはねそこら辺の事情は私は全然分らない。

林：あ、そうですか。

岡：それでね日本の方には阿波丸で帰るという事は大分前に知らせてある。それまでに手紙出してしまうと思うけど届いていないか轟沈された船が沢山あるでしょ。沈んだ船も沢山の有るからその中に郵便物が入っておるとすれば届いていない訳ですよ。電報でないですから。だからねそういう事情がありましてとにかく阿波丸が台湾沖で轟沈になったんですよ。3月28日に出て29、30、31、4月の1日、4日後に浅海さんも子供さんを連れて正木さんも子供さんを連れてみな乗船されて、陸軍だから。主人も長男を連れて乗ったんです。ところが出発間際になって海軍側の人はすみませんけど降りてくださいと言われて何故か分らないんですよ。自分ももう日本へ帰るつもりでいるのに。降りてください言われたから主人は長男を連れてとどこもまたまた船から降りて来てそして残った訳。我々と一緒に帰るように残った訳。それでその時下村中将がこういう事は誠に遺憾であるから自分が責任をもって次の船を用意するからすまんけど待ってくださいと、海軍中将がね私たちに言って下さったですよ。それでその晩は残念会をしたんですよ。そして待っておるうちにこんど3、4日すぐ経ちますよね。4月の5日にちょうど今度船が4月7日頃に出るからちょっと5日に皆が集まった訳です。それで浅海の奥さんが“岡野さん阿波丸は毎日今までどこそこ航海していると無電が入っていた。けども4月1日から無電が入らんようになった。どういうことでしょうか？”というて奥さんがとっても青い顔して心配しておられた。その頃主人も知りませんよね。阿波丸が沈没された。これは轟沈ですから。轟沈いうと一分間に沈む事ですから。いくら大きな船でも一分間に沈むいうたらたいしたものだから助かる人はいないんですが。後の話では撃ったアメリカの潜水艦の艦長はね海に誰か一人浮いておると誰か知らないけどその人を救いあげたんですよ。それで潜水艦に救い上げていまの船は何という船かと聞いたんで。阿波丸だと。その話をした人は自分は阿波丸のクック長だったから知ってるですね。そしたら潜水艦の艦長は手を叩いて残念がった。ああ撃つんじゃなかったととっても残念がった言うていう話は後になって聞きましたよ。だから潜水艦の艦長のミスエイク。それでねその為に皆阿波丸で帰るという事は大分前から分かっていたから。南方の資源も積みたい放題積んでそして南方に技術で派遣されて居ったエキスパートの人もみ

な船に乗せてもうこれが最後の船だから皆乗れ乗れいうて乗せてそして航海して行ってる途中にこれは白十字のマークを付けて航海絶対安全というアメリカ保証付きの船だったんです。それがやられたでしょう。だからその潜水艦長頭にきたんですね。ま、この人は後ね、艦を降りてから頭が変になった言う事聞きましたかね。大事な人が皆死んでしまったでしょ。そして南方の資源を日本が積んで帰るいう船が皆海の藻屑でしょ。だから日本も莫大な損害ですよ。でも阿波丸で海軍の人は降りなさいと言って主人と長男が二人降りてきたでしょ。タラップまた降りたでしょう。けども私主人しか見なかったから何人降りたか其の時知りません。がとにかく降ろされた事だけは不幸中の幸いだったです。それで主人は助かった訳です。

林：あのもちろんそれでもって結局一家そろって後で日本に帰れる事になった訳ですがその阿波丸が出る時に結局最初にご主人様とトーマスさんとお二人だけだったんですね。

岡：そうそう。

林：それはつまり残り3人はシンガポールに残るという事で決まっちゃった訳でしょうね。

岡：さあそれがね。いまだに分からない。

林：でもやっぱり其の時は複雑な思いがあったでしょう。

岡：その時はもう其の船が最後の船と決まっていたから、この船が南方から帰るのはもう最後の船。もうガダルカナルの方では沈没沈没、撃沈撃沈でね日本の海軍も沈む。で日本も負け戦になっているからこの阿波丸で帰るのがもう最後の船だよという事は聞いておったのです。で無理さい(?)だけひとを乗せた訳。

そして品物も積みたいだけ積んだの。本当はこの船は南方で抑留されているアメリカ人に慰問品を送る為に出たんだからアメリカは保証しなければいけない。白十字のマークを付けて行って戻るという話だった。ところがこれが最後だから積めるだけ人を積んで荷物も乗せたいだけ乗せてラバやキニーネやらゴムやら沢山南方の資源を積みたいだけ積んで其の船に乗せた訳です。ところがそれが轟沈されて皆海の藻屑。台湾沖で海の藻屑になってしまった。

林：あのじゃ船が出る前にご主人とお子さんが降りて来られたのはもう見てられた訳ですね。

岡：見てました。タラップ降りて来るの見てました。他の人も降りて来たと思うけど主人と子供しか見てなかったから一家族だけかなと思ったのですが。ちらちら男の人が降りた様な気がするのね。だから海軍主人一人じゃないですよと思ってね。誰が降りたかももう分かりませんよね。そのころはもう私たちも主人達が日本へ帰るのだから海軍側で約束していた住宅はもう皆空き家にして、どこか他の所をね家を今度町の方の家を借りてましたから。そこへ引っ越しもしなくてはならず私たちは残らなくてはならず主人は日本へ帰るということだったのですがまあ運良く主人は降ろされてそこへ残った訳。

林：そうするともしですね、其の船に乗っておられたらまあ最終的には船は沈んでしまう訳ですけど、その出発前は少なくとも家族が別れ別れに生活するという事は当然覚悟された訳ですね。

岡：その前の日位に。

林：それは、だけど大変な事で。岡野家としては大変な決断をしなければならなかった。

岡：そうそう。まあ子供を一人連れて一人になって、私達が私と娘が残されてどうなるか知らんと心配してね。主人だけが先帰るのかしら。まあ仕様が無いこれも軍の命令なら仕様が無いわ

と諦めますよね。あの頃は日本人の女性は諦めが良かったですから。(笑う) 死んで帰れよと
いって戦陣に死んで帰れよというて送り出したのですから。まあ諦めが良いのでしょうね。まあ
仕方がないはね軍の命令ならと思って。ところが降りてきたからやれ嬉しやと思って、今度新
しいハウスに入って長男も学校(に入って、) 4月の5日にちょっと皆な会合した時に浅見さ
んも正木さんも心配そうな顔をしてらして、主人だけが居るのですから私だけ心配そうな顔で
きませんがね主人が戻ってきたのですから嬉しさと一緒に。ところが次の船は今度は4月7日
に出るといのです。だから浅海さんも正木さんも皆一緒に船で今度は氷川丸という病院船で
日本へ帰ると言う事になったんです。それでそのときに4月5日だから長男はシンガポールで
日本人学校が始まっていたから。日本語学校の一年生。初めて引っ越しした所からの初め
ての小学校へ通わなならん。もう頭がごちゃごちゃしてますからね。もう忙しい事となにやら
かにやら引っ越しの荷物とやらなにやらごたごたしていますところで、ちょうど主人が居りま
したからラッキーでした。4月5日に日本学校の入学式が有るから長男は学校に行かなくては
いけない。それで私はベビーがおりますから5月に生まれたばかりのベビーがおりますから、
あれ其の時ベビー居ったのかね。いや5月に生まれたのだ。そのとき4月にはまだでしたけ
ど大きなお腹をかかえてだからそんなに外にも出られないし迎えにもいかれないし。それで1
2時半日だそうだから必ず学校終わるまでに迎えにいきよと主人に念を押したのに
うんうんよしよし言って仕事にすぐ行きましたよ。自分はね。ところが12時過ぎた頃にね長
男が戻ってるかと私に聞くでしょ。帰って来て。“あら、あんたが迎えにいく都合になってい
たのにどうしたの”と。“行ってみたら誰もおらん。学校はもうクロウズになって誰もおら
ん。”“ああしもうたね。”もう時間過ぎたら男の子一人で広い学校屋敷に残されたら心配でし
よ。だから自分は歩いて帰ったか出たかね。どこか。。

林：行き違いになっちゃった。

岡：行き違いになっちゃった。それで其れを聞いたらこちらは胸騒ぎがしてね。ああ困ったな。こ
れはどういう事になったかな。とにかく、あんた学校には居らんいうのだからまた探しに行こ
うかな、と思って主人が家を出て。私たちはまあ仮住まいで本家には誰かが住んでましたよ。
誰か知らないけど。それで私たちは裏に一軒家が有った。そこを借りて入らしてもらったのだ
から。そこからゲート開けてドアーを開けてみたらそこへひよこんと立っとなるの。長男がね。
“わーよかった。戻って来た。”初めて行った学校に初めてそれもねオーチャン通りいって広
い通りをとうり越して行かねばならない。私でもよう覚えていない様なところをね。6つか7
つになる子供が学校から広い通りを通り越して通り越して道を横切って渡って家まで帰って来
たの。まあよう帰ってきたなあと思ってね。

林：それはやっぱり息子さんも大変な心配だったでしょう。

岡：心配で帰って来たけどね前の方は誰か他の人が住んでいてこのゲートが開かない事には中
にも入れない。其所へ立ってこれが自分の家かなどうかなと考えていたそうです。そうしたら父
親が戸を開けて出て来た。それでやっとなが家だと分かって息ついた様な事でした。あの時の
ね心配といたら寿命が縮む。それがね、後から聞くと学校から帰る頃に自分は一人鞆をてく
てく提げて道を歩いていたらシナ人がニシブシなとかいって自転車の横にワゴンが有ります
ね。サイドカーみたいな。あれにここに乗り自分が連れて行ってやるから言って、でも乗った
って家の番地もストリートも知らないでしょ。ノーノー言って自分は知らん顔して歩いた言
うの。良かった。其れに乗らないでそれに乗ったらもう何処に連れて行かれたかもう分からん。
人買いに売られたかねサーカスかどっかに売られたかもしれない。だから良かったね。でも無
理して自分は歩いて帰ってきたのよ。よう道を覚えとったね。自分もやれやっとなが家へ帰って着
いたことだから本当に自分もやれやっとなが家へ帰って着いたことだから本当に自分もやれやっとなが家へ帰って着
いたことだから本当に自分もやれやっとなが家へ帰って着いたことだから本当に自分もやれやっとなが家へ帰って着

たです。主人も送り迎え出来ないでしょ。自分も軍の方の仕事してる関係で。かつてにここみに勝手に子供迎えに行く言っ行って行かれないから。それでもう学校休め休め。もう日本に帰るんだから日本に帰ってから学校行ったら良いわと言う事。それであの子は幸せな子で小学校一年生から七年生まで日本の小学校へ通いました。倉吉の田舎ですがね。そこへ通いましたから良かったけれどもうとにかくその心配が一つとそれから二日後に今度又荷物纏めて今度は氷川丸に乗らなければいけない。氷川丸に。病員船でしょ氷川丸は。でも主人は病院（勤め）と言う事で乗って私は名目上看護婦言う事で乗って、だけでも看護婦が子供を連れておって危ないから子供はなるべくデッキの方へ出んようにと。そしてまあおったのですがやっぱり台湾沖が一番危なかったんですね。

林：ちょうど阿波丸が沈んだ辺ですね。

岡：阿波丸が沈んだよりもちょっと手前だったと思う。よう知りませんが。なんか其所ら辺だったような気がするんですよ。そしてそこでまた看護婦達が右往左往してああ鯉節は何処行ったモップは何処いった言っ探さるんですよ。私は看護婦いう名目だから看護婦達が寝起きするそのある場所をかりておったのだから其所にそうかは言わないのよね。そしたら鯉節だモップだいって騒いでるのよね。どうした言ったら敵の潜水艦がストップ命令をだしたと。この氷川丸に。そいでこの船がギーギーとまた停まったんですよ。子供は皆上から降りて来て上の方でうろうろしていたらいけないからほんで皆下へ呼んでじっとしておったですよ。ま一時間ぐらいだったろうと思うんですよ。ところが10分か15分ぐらいだったらしい。その船は絶対違反をしていないという事を認めたから行ってもよろしい。

林：病院船ということでアメリカ軍が許した。

岡：許したの。病院船と言う事で。許してくれて。それで行っても宜しい。それで二度目でしょ。阿波丸で降ろされてまた氷川丸でこういうことがあってそれから今度佐世保まで帰ったら佐世保に着いたとたんにこの船はすみませんが今これから空襲が有るからB29が来るからちょっと郊外まで出て欲しい。また佐世保から沖の方までちょっと。。

林：ああ船が戻っちゃった。

岡：ああ。出なさいと。佐世保は危ないから。どこ空襲されるか分からないから。そしてどの位出ていたかね。2-3時間出ておったでしょう。そして、はい今度入って宜しい、言っ。佐世保に又入った。さあ降りるのかな思っ荷物まとめて降りようとしたらちょと待って。今山陽線もt東海道線も汽車は不通。故障で。レールは破壊されておるし。どこも通れないから裏日本及び東北の人はこの船が舞鶴まで駆逐艦が護衛して舞鶴まで行きますから舞鶴で降りてください。私舞鶴ならすぐ近くだから舞鶴まで行きますとね。それで駆逐艦が氷川丸をぐるぐる回りながら護衛してくれて舞鶴まで入ったんです。駆逐艦が2隻か3隻だったかね。とにかく2隻は見ましたよ。そして護衛してもらって舞鶴へ入った。それで舞鶴にはいったのは大分夕方だったですよ。さこれから電報打とうと主人がね。どこで打ったら良いかしらいうてね。電報を家へね。今舞鶴着いた言うてこれから帰るからいって電報出して。手紙出しても届いていないだろうから。そして今電報打っても詰まりませんよ。夜。三日ぐらいかかるから汽車で帰ったほうが早いですよ。そうかなそんなだめかな思っね。それで舞鶴から汽車に乗って鳥取県の倉吉まで。

林：その汽車は動いていたのですね。

岡：その汽車は山陰線の方は。山陰線は空襲ウ受けてなかったから。山陽線と東海道線はもうだめ。それで倉吉まで行っもう夜中の12時前でしたよ。其処からまた30分ほどお家まで

歩いて帰ったのです。満月の夜でしたからね。それを覚えている。月夜の道をあのころ電気もそんなに使えないし。それで満月の夜。月を明かりに家へ帰った事を覚えている。

林：それは全員5人でお歩きになった訳ですね。

岡：あー全員。ノー。まだまだあの子は生まれていませんから。明るる年。明るる年。

林：ああ、それじゃ、4人で？

岡：4人で。主人が大きなリュックサック背負って、私はおんぶして。おんぶした？ ああ、何おんぶしたかね。とにかくおんぶして。ああ、おりました、おりました。シンガポールから。5人、5人。

林：その時は例えば佐世保に着く時は当然日本の国が見えて来る訳でほっとされたのですか。それとも何か不安だったのですか。

岡：ええ、やはりね。ほっと。山陽線と東海道線がだめでしょう。どうやって帰るのかなと思ったのですよ。ところが舞鶴まで行くゆからやれ嬉しや。心配と嬉しさがねいつでも交互に来てた訳。

嬉しさと心配とがね。あの当時終戦直前ですからね。日本も一番惨めな時でしたよ。そして日本へ帰って見たら阿波丸で帰る言う手紙は出してるが阿波丸は沈没したという台湾沖で沈没したというニュースが親は知った。後から分かったんですよ。だから三、七日の法事を私達の写真を飾って。

林：降りたという情報は入ってない。

岡：ええ。

林：という事は当然亡くなったという事で。

岡：ええ。亡くなったという事で法事をしてた。三、七日にしました。49日かの法事をして今皆が引き払って帰った所で。そして主人の妹が丁度お産をした日でそれで母は妹の家へ行っているし、父だけが残っておってそしてもう吃驚仰天。夜中ですからね。

林：それは何か全部重なってしかも亡くなったと思う人が。。

岡：思う所へひょこんと帰ってきたもんだから。

林：目の前に出てきたのですからこれはもう大変ですね。

岡：ええ。吃驚して。主人がね本当にこれ幽霊じゃないかと思ったらしいですよ。(笑い) あの頃田舎の家は電気もそんなに今のようにこんなに自由に電気は点いていませんからね。もう本当に吃驚した事と嬉しい事と重なって何もかにも重なった状態でしたよ。

林：やっぱりあれでしょうね。お家にお着きになった時はやっぱりほっとされたんでしょうね。

岡：ああ。ほっとしましたよね。それで母をすぐに誰か呼びにやる。母はまたあわてふためいてとんで帰って来るね。やれこれから餅つかないかん言うてお爺さんとお婆さんが喜びだ言うてまあ食べるものもよう食べないで帰って来たらろうから持ちなどつこう言うてまあ年寄りですね。一生懸命餅をついてくれて。私食べてきたから良い。もうあまり入りませんよね。食べて

来たから良い言うてもやあ喜びだ喜びだと言うて夜中になって餅をついて食べさせてくれて喜びの余り餅をついて食べさせてくれた事覚えてます。

林：あれですね。クリスタルシチから遠路ゴアを經由してわざわざ歩いてまで帰られたその時のお気持ちで大変いろんな複雑な部分があったんじゃないかと思いますが。まずはほっとされたというのがあのあれですか。

岡：ほっとが一番大きな。

林：で其の時はやはりお子様の事だとか日本の将来だとか。。

岡：そうそう。入学の事ね。長男はもう学校行かなくてはいけないし。だから入学させなければいけない。もうなんやかんやごっちゃごっちゃ。丁度其のとき家にね大阪に嫁にっていた娘の親戚の人が疎開して来てね。丁度家におったんですよ。そこへ私たちが戻ったからこの人達今度は妹の家の方へ引っ越し。其の人達を引っ越しさせて私たちがそこへ入ってもうなんやかんやですからね。もうあんまりいろんな事が重なって。それから長男は学校へ行かす。そして10日目にね5月の1日だと思いますけど夕飯の後主人が急に腹痛を訴えだして。そして屈んだままいごかないのよね。お腹が痛いお腹が痛い言う事で。それですぐ病院まで誰かに走ってってもらったんですよ。倉吉の病院だからちょっと一時間位あるんですよ。だけどそれに夜中だから夜明けになって行ってもらった。どころがそんなにお腹が痛いのならとにかく病院へ来なさいと。それでね。病院と言っても自動車も無いし自転車も其の頃無いし。戸板にね紐を付けて戸板に布団を敷いて運んだ訳ですよ。やかに水をいれてね。それで途中で水を飲ませ飲ませそしてやっと病院に着いてお医者さんが診察してくれてあこれ胃潰瘍穿孔。胃に穴があいてそして穿孔していると言う事が分かって。でお医者さんは最初から分かっていたんなら良いけど盲腸かと思って盲腸を手術しようと思って開けてみたらどうも盲腸ではないらしい。そしてご飯粒が腸の間に落ちている。ああこれは胃から出たんだと言う事が分かって。ところがもう発病後10何時間も経っているかあらこれはもうきよろきよろしておったらもう間に合わない。24時間のうち18時間たっているからこれはもう危ない。だから胃潰瘍の所胃潰瘍の手術しないでこらへんの腹膜をとってちょっとかぶせた応急処置だけをして手術終わった事にしてお腹も縫ってそして家に帰った訳ですよ。一週間ほど後に。そのころ入院している時に今広島から岡山から帰ったという知り合いの小母さんがねりんこをたった一つお見舞いに持って来てくださった。病人に言うてね。あの頃りんごでも無いのですから。岡山から土産にいうてたった一つのリンゴを母がまた届けてくれた。病院にね。あの頃のお見舞いにりんごがたった一つ。そういう惨めな時代でした。日本が。ええ。ところが御陰さんで山陰にほうは空襲なし爆弾もおちていないから山陰は鳥取県島根県は助かったの。ところが米子いう町もう近いうち今度は山陰が空爆されるとそうすると米子のこの町はこの通りとこの通りはもう家を崩しなさいともしも焼夷弾でも落ちたら家を崩しておったらそれだけ町は助かるから目抜きを通り良い所家を壊せという政府からの命令で家を壊した。とたんに明るく日が終戦。まあ目も当てられない其の人達。家を壊したとたんに終戦で。本当に気の毒な。悲惨な目に皆あってるんですよ。日本の人たちは。

林：そのときはお宅のご一家は着いてまもなくですから日本にも慣れないしだんだん戦況が悪くなって来て。。

岡：そうそうそしてその村に帰ってみますとね近所にも若い人誰もいない。中年の人誰もいない。年寄りとそれとお嫁さんと赤ちゃんとだけです。もう皆兵隊にとられて。だからシンガポールで腰の曲がった兵隊さんをみて吃驚した。ああノーワンダー村にも若い人いない皆兵隊にとられてしまって。哀れな事でしたよ。日本は。

林：お子さんはやっぱり大変な思いされたんじゃないですか。

岡：ところが有り難い事に。空襲されていませんから。鳥取県は。それでそのおかげで空爆はないし焼夷弾で焼かれた家は一軒も無いし。それでお米なんかもまだまだ豊富にあったわけです。それが大都会なんかには皆配給米にとうもろこしが入ってなんかかんかん入った配給米でご飯もろくろくに食べない人が駅の構内で行き倒れでパタンと倒れたらよう起きないでそのまま死んでしまう。そう言う状態でしたからね。まああれでも鳥取県の方でしたから御陰さんで私たち5人帰って来たらお米をセーブして食べましょうというて母がねとにかくお米はセーブしなくてはいけないいうてね母はね苦労したと思いますよ。5人急に増えたんですから。人数。町ではお米はないんだから。お米も無い。とうもろこしなんかの配給でお米の代わりにチキンの食べるとうもろこしをね配給して貰って食べてる状況だから。もう散々でした。日本は。

林：それで3ヶ月位して日本が終戦を迎えるわけですね。其の時のことはどうなふうに覚えていらっしゃるでしょうか。

岡：そのときは終戦。て母がね今日はラジオで珍しい放送があるから皆3時から聞きなさい言うてね。村なら村の世話人がね村をふれて回りましたよ。それで私達楽しみにしていたら終戦の放送。今上陛下の昭和天皇の放送ですよ。だから皆其の時の私はやれやれと思った。助かったと思った。これで日本も助かったと思ったんですよ。だけど皆ほかの村の人はああアメリカの兵隊が来るぞ女子供は皆引っ張られて殺されるぞ。なんとかかんとか心配する。そんな事は無いと言いたいけれど保証は出来ませんよね。ああ皆気をつけなくちゃね。と言う様な事しか言われない時代ですからね。皆村の小母さん達は女子供は皆ひっ捕られていくぞなんて言って心配してました。私はアメリカは絶対にそんな女子供をひっぱって行く様な事はないとは思ってたけど口にはだせないでしょ。アメリカびいきと言われるから。何言うてもアメリカびいきアメリカびいき言われたら何も言われないですからね。黙っているよりほか仕方ないですから。

林：まああれですか。日本にお帰りになってそこへお住みになってる時に当然回りの方はアメリカから帰って来たと言う事を知っていらっしゃるからやはり冷たい目で見られていたような部分があるんですかそれとも。。

岡：あったんですが、主人が10日目に病気になったでしょう。帰って10日目に大手術してでしょう。そして主人が病気だった為にね又私が主人の介抱に一生懸命専念しないといけないでしょう。世間の事情あんまり良く分からないんですよ。ただ家庭がだけ。だけど側では多分そんな目で見られておったんだと思うんですよ。でもそして私達の服装も違うでしょう。皆もんぺ履いているでしょう。私達そんなの無いでしょう。ちゃんとした服装しかありません。上等では無いけど木綿にしる確かな服装しているからやっぱり羨ましがられたと思うですよ。あの長男なんかね学校へ行くのでも。だからすぐに国民服を買いましたよ。皆国民服だから同じなんだからね。だから国民服で学校へ通わせましたよ。ところが国民服でもね余分なのがないのよ。桑の皮で織ったという学生服。だから知れたもんですよね。なかなかねあの当時というのは本当に哀れなもんです。それでどこまで話がいきましたか。

林：鳥取のお話ですけど。終戦になった訳ですね。それであのこれからまたちょっとこの先があるんですけど。ここでちょっと一度お休みをしましょう。

岡：あそうですか。

林：まもなく終戦になってしまう訳ですけどお着きになってからアメリカから帰られたという事で例えば地元の人達とか日本の軍部とかなんというか取り調べというところとちょっと大げさかも知れ

ませんがいろんな事聞かれたりまた周囲の方が興味を持たれて聞いて来られたりとかそんなことはあったんですか。

岡：はい。時々ね。有りました。丁度その日下小学校は主人の母校ですしね。そこで一度皆が村の人も話しを聞きたいからアメリカの事情も聞きたいしそして講演会をしてくれないか。で主人は最初は何の気無しにそれでは行きましよう言っって講演を約束したんですよ。そしたら前の日位になってねどんな話をするか話の内容を知りたい。そしてアメリカが強い事を言っちゃいけない。日本が弱っている事も言うてはいけない。とにかくあしちやいけないこういう事言ってはいけない制限が次々でますからね。これは面倒な事になった。やめようかねと思っただけど自分はオーケーしたんだからしょうがないこれはって明るく日行ったら憲兵か巡査か二人ちゃんと話を聞きに来てね。何をしゃべるかね。ちゃんと聞きに来ておりましたよ。それで自分も本当にいろいろ話したい事は山ほど有るけど話せないしだから本当に困った言ってましたよ。言いたい事はなんぼでも有りますでしょ。アメリカの良い所が言いたいしで日本も今はとても疲弊しているという事も言いたいしそれもいえないでしょ。だからねもう言いたい事も十分に言えないしもうこれからはお話もせんいうてましたが。あいにく病気になった。5月1日に。一回だけ其の前に。でその後はねもう病気だ病気だと言ってみなことわりましたよ。そのかわり今度は8月の終戦になりますね。8月の15日の。其れより前に広島原爆と長崎原爆があっって。広島原爆の時はドドーンという響きは鳥取まで響いたんですよ。とっっても大きな響きが響いた。皆が何の音だろう。皆に聞いても誰も知らない。皆知らない。それから今度一週間ほど後に長崎に原爆が落ちた言う事これもまた新聞で知りましたよね。だから広島と長崎と続けて原爆が落ちたんだからこれは普通じゃない。思っっておったら今度は村の放送で15日の何時何分にとっっても珍しい放送が有るからそれを皆聞くようにと伝言が回ったんですよ。それでそれを聞きました所がそれは昭和天皇の敗戦の終戦のご挨拶。敗戦言うたら悪いですね。終戦のご挨拶を天皇陛下がされました。それでどうとう日本わ戦争に負けたのかな。ここまで疲弊していたら無理もないわと私達はそう思いました。けども日本の人はあれほど頑張ってるんだから何時かは勝つ。長野の何処かに大きな防空壕が掘られている話だから日本の軍隊が皆そこに隠れても隠れる様な大きな防空壕が有るんだとか。千葉県沖にも防空壕が掘られたとか何とか言っていろいろね日本の軍隊が隠れる場所そこから出てでも弾で撃つ。出ては撃つ。出ては撃つという計算ですよ。そういう話が有りますとああととても駄目だわねと私達は心では思っていましたけどそれは絶対言えない事ですわね。

林：あの住んでらした周辺の所謂昔から居られる方はやはり不安には思っていた訳ですよ。

岡：そうそう。アメリカ兵が今度上陸して来るから。上陸して来た場合には女子供は皆拉致されてしまうんだよ。言うて一人のお婆さんが言い出すと皆がそれが拉致されるだろう言うのが拉致されると言う事になって話がこうもうね。

林：噂が噂を呼んでどんどん大きくなって。

岡：そうそう。とっってもあの村中の人々が戦々恐々としてたです。私なんかはそんな事信じませんからそれに丁度主人は病人だし信じないしなるようにしか今まで来てるんだからなるようにしかならないと思ってもう半分はもう安心してます。けども主人としては主人の考えとしてはあのままでさよならしたんだからパールシチの人に言っって挨拶もしたいしどうなっているかも見たいし日本に何時までも居る気はない。どうしてもハワイに帰りたいと病気になっけてもその念願をくずしませんでしたよ。私はもうね子供が小学校を出たんだしこのままハイスクールになるしこのまま日本で暮らしましよう言って一度は言いましたけどもう主人の考えは決まっていますからねそんなら何時か行かなきゃいけないかなと思っって待機しました。

林：お子様はその時はどんな様に思っていましたか。

岡：子供はね。子供の意見なんか聞かん。こちらが決まらんですからね。ええ。(笑い)

林：其の時はもう日本に馴染まれて？

岡：もう日本語しか知らないからね。もうハワイの事なんか赤ちゃん覚えていませんから。日本のことしか知りませんから。英語いうても覚えていませんしね。アメリカの学校に入っていましたからまだ。

林：それでま終戦迎えて進駐軍が日本に来る訳ですよ。で鳥取の方はアメリカ軍が実際に駐屯したとかそういう様な事は有ったんですか？

岡：鳥取と米子には有ったんですが倉吉とか安芸の方は有りませんでした。米子市鳥取市には駐屯兵が少し居ったのですがでも米子の方に多かったですね。鳥取よりも。米子の方に駐屯兵が多かったと思います。

林：という事は終戦後にアメリカの兵隊さんを見かけたとかそういう様な事は余り無かったですか。

岡：倉吉の方に居りましたからそういう事はほとんど無かったですね。

林：そうすると例へば終戦後に昔アメリカに居られてそして交換船で帰って来られた。じゃっかん日本に住んでらっしゃる方とは事情が違うんですが終戦後に米軍が何か聞いてきたり尋問されたりとかそういうような事は。。

岡：そういう事は絶対有りませんでした。

林：無かったですか？

岡：有りませんでした。

林：あのその辺に住んでおられた方も終戦前と終戦後というのはもちろん気持ちの上では変わったと思うのですが生活の上では余り変化が無かった訳ですか。

岡：あのね、私達は倉吉に居りましたが病気が治ったとたんに主人は本山の方の命令で(あの何だったか。名前忘れちゃった。)松江に山陰教区の教務所言うのが有ります。

林：ああ松江に有る訳で

岡：ええ。松江に。それでそこの勤務になりました。

林：と言う事は転勤されたような

岡：そうそう。あそこに勤めておりました時々帰って来てました。

林：あ、御家族は鳥取に居られたんで。

岡：ええ。5月のうち病院におってそれで退院しましたでしょ。それから後元気になりましたから本山の方の命を受けて松江に勤務になりましたからね。そういう軍部の方の情勢を探りに来る様な事は有りませんでした。

林：で、他の日本の方もその辺の方にもあまりそういうような噂が出たとかですね米軍が来るとか何とかそういう様な事も全く。。。

岡：そういう様な事も。ま、米子ならね駐屯兵が居りましたから、ちょこちょこ町をねジープで動いてる兵隊もいたでしょうけど。こちら倉吉の方は田舎でしたから。

林：表面上は余り変わらない。戦時中も戦後も余り変わらないと。。。

岡：戦時中も戦後も余り変わりなくね、過ごしておりました。不幸中の幸いでした。

林：まあ、それはね、都会でしたらもう様変わりだったと思いますけどね。

岡：そうそう。ですから余り不自由もしなくて、そしてあんまり変わった事も無く。主人がそこに居ませんから松江の教務所に今度は勤めていましたからちょっと松江に住んでいて時々帰って来る様なことでしたから。

林：でお子さん達はそこで学校に通って。所謂今で言うにご主人だけ単身赴任で。

岡：単身赴任。そうそうそう言う事でした。そして教化指導員言う名目で松江の教務所には500カ所お寺が有るんですよ。だから山陰、鳥取こめて500カ所。そのお寺お寺を皆まわらなくてはいけないのが主人の仕事だったらしいですよ。今日はどこそこに今日は何処そこに居る言うてね。だからそういうお寺でいろいろ講演を良く頼まれていました。

林：あの、それで最終的にはハワイにお帰りになった訳ですけど、もう先ほどのお話に有りましたようにご主人は最初からハワイに戻りたいとおっしゃってらしたようですがその辺が具体的にやって来た時には御家族はどんなような御心境だったのでしょうか

岡：そうね。私はね、主人一人行ってね、一人単身赴任のような具合で一人ハワイに行ったらどうと言う事も言うたのですよ。でもね結局は私もパールシチの人には大変お世話になったし、だからお礼も言いたいし、お礼の一つも持って行きたいし言う様な気持ちは精一杯有りましたから。じゃあ私も附いて行こう。その代わり子供はこれから英語の世界になるから大変だなとは思いましたよね。大変だがこれも仕方がないよね。

林：でお子さんは其の時はどんな様なご心境だったのでしょうかね。

岡：そうね。

林：日本の生活というか学校にも行かれていたから、まあ日本人ぽくなられていたんじゃないかと思うんですよね。だからやはりハワイに来るといのは大変な。。。

岡：小学校はもう日本人だからね。小学校日本人で過ごして今度こちらへ来たら英語でしょ。あれは7年か8年生位でしたね。それでもうそれから今度英語の世界になりましたから本人は苦労していますよ。もう12,3になってからABCからやり直しだから。だから家庭教師つけたりね特別ななにつけたりして勉強してもらって、そして小学校の下から入れてもらえたら8年生、昔の子供達は誰が同級生だったかいうたらあの人この人も知ってる言うたらそのクラス入れよう言っただけであらう校長先生よね。そして8年生に入れてもらって妹の方は一級下げて6年生に入れて貰ったかね。とにかくその代わりあの時代の子供は覚えが早いもんですね。半年経つともう殆どもう変らない位覚えますからね。その代わり習ってない事が多いから、それをね又後から復習させなきゃいけないからね。私の心使いが大変だったと思いま

すがね。あの人に頼んだりこの人に頼んだりしていろんな事を教えてもらった事は確かです。

林：でもやはりあれですね半年で大体英語が分かるというのはそれはやはり昔居られた事も有るだろうし環境もね。あの英語の環境も有るし。。

岡：英語の世界に皆入って行く。子供は皆英語ばかりでしょ。だから覚えるのも早いですよ。それで8年生だから今度は9年生でしょ。もうハイスクールでしょ。今度ワイパフのハイスクールへ行かなきゃいけない。それで私はこれどういう事になるかね。ワイパフのハイスクールに9年生で入って、9、10、11、12 四年間で英語をマスター出来るかなと思っていたら、やっぱり出来たんですよ。英語の試験で大学パスしましたからね。ここ生まれの人で試験にパスしない人もおったんですよ。だからもうあんた肩身狭くしなくてもね、パスしたんだからもう大丈夫と思ってね。

林：じゃあご心配がどちらかというところでもなくて順調に比較的順調にいったというような感じを持ってらっしゃいますか？

岡：そうそう。私はそう思います。まあね学年が一年ほど下がっておってもそれはしかたがない。一年位はね。でも娘も息子も揃って大学出て、そして今度あと又長男は日本の京都の龍谷大学ね、また勉強に行ったんです。仏教を今度勉強しなくてはいけません。開教使になる積もりなら。それでね良く息子には開教使になる為にどういう覚悟でなったかとか聞かれるんだって。けど自分はね素直にね開教使になるもんだと思っていたから苦労無しに自分が入ったと思うんだって言うてましたよ。とにかく日本へ帰ってからまた日本語のプロフェッサー、特別ね仏教のお経の本からね。まあ龍谷大学ではベーシックも習いますけど今度は学院（大学院）に入るでしょ。学院の方に入ってまたプロフェッサー特別つけて、また勉強させて、日本に結局学者コース含めて7年居りましたよ。そして帰ってきました。けどまだ7年じゃまだ一人前になりませんですよ。それだから帰って来てから今度いよいよ開教使という仕事についてから苦労したことだと思うんですよ。でも御陰さんで、最後の今ビショップ、最後のね、なにをやってますからもう後3年は勤めなきゃいけないんです。そうするとやっと私の所へ戻って来ます。

林：じゃあそれもお楽しみですね。

岡：そうそう。だから私はもう3年は必ず生きていないといけないと。

林：それはもう間違いないですよ。(笑い) それで岡野さんご一家が1951年ですかハワイへ戻られましたよね。其の時はもちろん本願寺関係の方は大歓迎でしょうけど他の方達との間では何も問題は無かったですか。日本から帰って来たと言う事が逆にプラスになった事もあるんでしょうか？

岡：そうですね。皆がね来て話ししてくれ、話ししてくれ言う所でね。あちらからも呼ばれこちらからも呼ばれたと思います。その当時はね。けども珍しがられたのでしょね。皆が日本の事知りたいでしょ。それでまだパスポートが出ない時にゴートン号（ウィルソン号？）で来る事が出来たということは一番最初にハワイへ戻って来たというんで皆が珍しくて日本の事。。

林：誰もじゃそういう情報は此処の方はご存知無い訳ですね。

岡：誰も知らない。

林：という事はどちらかと言うとそういう珍しい人が帰って来たと言うような受け取られ方をされた訳ですね。

岡：そういう様な所も有りましたと思います。世界裏回りだけど世界一周して、そしてインドからシンガポールからね、戦時中シンガポールに居ったという事は無い事ですね。そして軍が、アメリカはそれを認めていませんね、シンガポールを軍、日本の領地だったという事は。認めていません。だけど日本はそれを日本の領地だと思ってね日本の国として日の丸の旗を掲げてね。そして日本は威張っていたでしょ。

林：昭南島ですね。

岡：そうです。昭南島。アメリカは認めていませんのですね。

林：あのお帰りになってですね、もちろんいろんなお子様の教育だとか言葉の問題だとかたくさんご心配が有ったと思うんですが何か其れ以外でなにかいろいろなご心労があったんでしょうか。それともこうすんなりと又元の生活に戻ったという感じなんですか。

岡：私はその方ですね、私、呑気なんですよね。(笑い)

林：それならばそれが一番良いですよ。でもまあ昔居られた方も同じ所に居られて。。

岡：居られて。ただ最も親しかった人、それから年とって居られた人はもう亡くなっておられますからね。大分、8年シンガポール入れますと、8、9年でしょ。8、9年でそして又戻ってくるんですから前元気だった人居ない人、引っ越しした人、いろいろ有りますから。そしてまた時代が十年一昔と言いますから時代もまた変わってますし。そして終戦後ハワイに帰りまして、まあ何と豊富にハワイには品物や食べ物がある事だと思って感心した事ね。それがまず第一。まだまだ日本はあんまり復興していません。これから復興するいう所です。で、そこに居たらだんだん復興が目に見えてきたでしょうが、これからいう所ですからまだまだ日本は食料も豊富じゃ無いし、ハワイはいかに食料が裕福で豊かで有るなと思って感心した事です。

林：そうすると今からして思われると。。

岡：今からして思うと逆だった時代も有るんですよ。今はどうですかね。ここ私は15年ほど日本に帰っていませんから分かりませんが。今はやっぱり日本は豊富ですね。何でも豊富で豊かで有難みを知らない国になってしまって、ちょっとこう昔の90年前の我々の時代と違いますね。もう考えが変わって。

林：なんかちょっとその辺が残念です。

岡：ええ。変わってますよ。日本がすっかり変わってます。田舎に行けばまだそうでも無いかも知れませんが。昔とすっかり変わって。。

林：特に大都会の人は。本当になんか変わりましたね。

岡：ええ。変わりましたね。隣の人も誰が住んでるか分からない位に。変わってます。

林：それでご主人様は51年にこちらに戻られてすぐモイリイリの方へ行かれた訳ですか？

岡：64年までおりました。(ポールシチに)

林：ああそうですか。

岡：だからポールシチにあれから戦後10何年居りました。64年まで。

林：それでこちらへ。(モイリイリへ)

岡：それでこちら(モイリイリ)へ来て又75年まで。だから10年。

林：お亡くなりになったのが76年ですか。

岡：68歳でした。だからこの間やっと33年忌を勤めまして、やれやれと思いました、私も。ああもう33年。

林：でもあれでしょうね。ご本人にとっては戦争という不幸な出来事があったにもかかわらず必ず戻って、ハワイに戻ってまた布教をするんだという信念をお持ちだったのでしょうかからそういう意味では大変に満足された生活をされたんじゃないですか？

岡：と思います。私もそう思いますね。

林：と、奥様としてもいかがでございますか。やはり苦労は沢山あったけど最終的には報われたというような。

岡：そうですね。私もそれは苦労は苦労と思わないで喜びに変えるようにね努力はしましたが。とにかく子供が日英両語分かってそして今元気にやっているという事は結局は有り難い事だったと思います。で、日本の終戦後の苦しい生活は親の御陰で助かってますし。それから、でも苦しいを苦しいと思わないで皆もそれでやって来てるんだからやれない事は無いし思っては皆苦を苦と思わないように努力して来ましたよね。そうしないとやって行けませんよ。

林：本当にそうですね。まあだんだん最後に近くなって来ましたが、一つ伺いたいのはですね戦争が始まって12月7日にご主人様が収容所に入れられてしまった。それでいろいろな苦労があって、ハワイに帰ってきて、今までいらっしゃる訳ですけども、このご経験というのは岡野さんにとっては一体、もちろん大変だったと言う事は良く分かるんですが、一言で言うとどんな感じをお持ちなんでしょうか？

岡：そうですね。まあ私も大体呑気な方ですからあんまり深く苦を苦と思わないようなタイプですから、それで、ま、一つは助かりましたね。これが神経質な人間だったらとてもとてもやって行けない様な苦労だったと思いますが私としては御陰さまで体も元気だったし若い時は何でもやって来いいうような元気も有りますし今でこそ年取ってますけどね。そんな元気もありましたし。だから結局はね私思いますのに今こうして主人は仏教的に仏教の布教に専念する一方で私は日本学校の学院経営の方に携わるようになりまして学校の方を一生懸命やっておりました関係上子供も日英両語話すようになりました事は有り難い事だと思ってこれもひとえにみ仏様の御陰だと感謝しております。そして現在の幸せな生活を精一杯エンジョイして幕を閉じたいと思っています。

林：それは本当に結構な事で。あの大変にお元気なのでこれからもずっとそのような状態が続く様にお祈りしています。

岡：有り難うございます。

林：あの今日は本当に長い間有り難うございました。

岡：いいえ。今日のご苦労さんでございました。お役に立ちましたかどうか分かりませんが

林：いや。大変に貴重なお話で。私も大体ご長男と同世代ですけども、私の場合にはその当時ずっと日本におりましたから其の頃の私が日本で居た時の生活の状態とかそれからどう考えていたかを照らしながら考えますとね、なかなか興味のあるインタビューでした。有り難うございました。

岡：そうね。私ね、思いますにね。ちょうど日本に帰りまして、終戦後ですからね、日本の教科書のいかにもお粗末な。東京の方はどうでしたか？

林：東京は、私は余り勉強しませんでしたけれども教科書はあったように。。

岡：有りましたけどね。こういうパンフレットみたいな。

林：いや。なんて言いますか。一応本にはなっていましたね。

岡：ま、鳥取県の方にはさいやくぐん（せいはいくぐん 西伯郡？）の教育方針が知りませんが教科書が誠にお粗末で。お粗末もお粗末もこんな薄っぺらな教科書で。それでそれが国語の教科書。あの戦後、とにかくマッカーサーの教育方針でやってきたもんですから戦後の教育のお粗末であったこと。私はそれを痛感しています。

林：あのなんか相当昔の事で私も記憶が定かでないですけど、教科書がなくて困ったと言う様な経験はあまりしてませんね。

岡：教科書は有りましたけどパンフレットの様な。。

林：いやなんか一冊になっていた様な気がします。誰かのお古かもしれませんね。

岡：いや長男ですから買ってやりますよね、新しいの。で、パンフレットの様なこうねスコッチテープで綴じた様なね。本当にお粗末な教科書でした。それで日本語を勉強して、地理歴史も無いし、もう本当に日本の教育はあの時ねあんまり感心しませんでしたよ。

林：あの最後ですが、お子様のお名前をそれからお子様、結婚されていると思いますが、配偶者のお名前等それからお孫さんの関係の事ですね。

岡：長男は今トーマス亮珠と言います。そして今は71歳。それから長女はまゆみグレース。これは長男はやっぱりナショナルガードかなんか軍隊の方にも関係した為に英語の名前がファーストネームになって。ところがまゆみグレースはグレースを呼び名にした訳でまゆみがファーストネームですよ。この子は名前はチェンジしませんでしたから。ちょうどこの時結婚してニューヨークに10年ほど住んでいましたからグレースに名前換えるチャンスなかったですよ。それで其の次がフランシスあきお岡野。フランシスね。この子はシンガポールで生まれて。。

林：44年ですか？

岡：そうそう。だから日本の国籍は有りますがアメリカの国籍は無かったです。それで1951にハワイに来ましてアメリカの国籍を取りました。ところがそれはナチュラルイゼーションですか。それになっている訳です。でも軍隊には入りましてしフランシスはちゃんともう正式な名

前になっています。あきおは呼び名になっている。だから家の息子と次男は英語の名前がちゃんと入っている。娘だけが英語の名前が呼び名になっている。

林：それで各自お孫さんが居られる訳ですね。

岡：そうそう。息子の方はもう結婚して孫が3人。そしてひい孫が4人。そして娘の方は孫が2人。ひい孫が1人。それからフランシスあきおの方は娘が2人。

林：あのお孫さんや曾孫さんのお名前まで覚えていらっしゃいますか。

岡：ええ。覚えてますよ。

林：ちょっと参考の為に教えてください。

岡：そんなら長男の方の娘はねアンあきこ。今は結婚してあずま。

林：ああ。もう結婚されてらっしゃる。

岡：それから長男の長男はブライアンじょう。。？しんじょう？ ああけんぎょう。けんぎょう岡野。それから次男の方はクレグ岡野。クレグしんじょう岡野。それから曾孫の方の名前も言いますね。

林：ええ。もし覚えていらっしゃれば。

岡：曾孫はね。長男のほうね。アンが結婚してますからね。そこに子供が3人。ケーシー、アリサ、それからエレン、3人女の子。それからブライアンの方はね女の子が1人この子がエイジャ。それからグレース。この子は結婚して山本になってるんです。岡野じゃ無いんです。山本。そこに女の子が1人結婚して女の子はけいこですよね。けいこが結婚して（子供が）マーシャル言う名前。だから私は合計7人孫がおって5人曾孫です。

林：じゃあ大変な大家族ですね。

岡：（笑い）25人。全部で25人。

林：これからそう言う方達と一緒に会われるのが楽しみですね。成長を見守って。

岡：そう。一年に1、2回はね。皆が一緒になる機会があります。ところが長女の方の山本の長男が今そこに居りますが生憎日本生活ですよ。日本の名古屋、愛知県に住んでいますから、だからいつでもミスするのは山本の長男と孫の長男とそれからフランシスの娘が2人ミスします。1人は日本でしたがもう日本から帰って来ましたからもうひとりがオレゴンに学校に行っているから、だからね。

林：じゃその他の方は全部ハワイにいらっしゃる。

岡：皆。皆ハワイ。しかもホノルルに。そしてしかも家の近くに。（笑い。）だからこれ以上の事は無いですよ。本当に。

林：あんまり近すぎても良くないというからスーブがさめない位に。

Merry Kimiko Okano Oral History Interview

岡：スープがさめない位でね。本当に近くなんです。カイクキのね。私が 22 番でしょ。長女は山本はね 12 番でしょ。それからあきお次男が 6 番。6 番と 12 番とそれから 22 番。それから孫あずま、ドクターあずまはねセントルイスハイツ。だからね皆近くに居ります。ただ山本が居らない。ジョンが居らない。何時も寂しく思っています。

林：でもあれですよ。ときどきお帰りになってゲットトギャザをなさって。。。

岡：それからフランスのほうの娘が 2 人まだ学校。1 人はやっと卒業して日本へジェットプログラムで、日本で 3 年間英語を教えています。それで今ちょうどこちらへ帰って来て、去年の夏、そして夏帰って来て暮れにここのハレクラニに就職しました。そしてもう一人はまだ学校。PHD を取る為に学校行っています。

林：大家族ですね。

岡：ええ大家族です。皆なで合計 25 人。

林：本当に長い間有り難うございました。お元気でどうぞ。

岡：いいえ。どうも。(終)